

### 終わってしまった夏は

### とりもどせない

●後悔と自己嫌悪で終わる夏。そして、その気持ちをひきずったまま九月のスタート。悲しいね。つらいね。もつとも、きみだけではない。そんな受験生が、周りにもいっぱいいる。さて、どうしようか。

●勿論、きみは気をとり直して再びがんばり始めるだろう。それは確実だ。しかし、きみはきつと分かってはいないはずだが、また後悔と自己嫌悪を味わうことも確実だ。しかし今度は、徹底的にきみを痛めつける。受験までの残り時間がなくなっているからだ。



●一体、人生に於いてムダなことはない。回り道にしても、失敗をしても、きみが年令に応じた成長をしていけば、決してムダにはならない。後悔や自己嫌悪を何回か味わっても、そこから現実を知り、自分の弱さを知り、次の試みのときの工夫をするというように進んでいければよいのだから。ただ、ある事柄に於いて、回り道や失敗をしないですむとしたら、それはその方がよい。何故なら、人生には、山程難問が待ちうけていて、好むと好まざるに関わらず回り道も失敗も重ねてしまうのだから、一つでも減らせば、その方がよいのだ。

●さて、今、後悔や自己嫌悪を味わい、またこの冬にも同じ気持ちをもっと強く味わうはずのきみ。再度いう。どうするんだ。ここが正念場である。再び決意して動き出す前に、よくよく

考えることだ。そうすることが、また次に行き詰まったときに立ち上る力を生んでくれるからだ。

●ということでは原則の確認。

①とにかく続けること。何故、後悔するかという、勉強が中断するからだ。中断することなく続けられれば、多少やり方にまずい所があっても伸びていく。(また、やる過程で、そのやり方もまた学習能力も改善向上していくものなのだ。)続ける人はとにかくすごい。いつの間にか、いろんなものを仕上げていく。

②点数が伸びるまでには時間がかかる。ある科目を適切なやり方で勉強すれば、力は着実についていく。ただ、模試は、その科目の総合的な力をみるもので、どこがでてくるかは分からない。解答を出すにあたって、複数の道具を使うことも多い。だから、力については、うる覚えの部分が多ければ、点数は、勉強を始める前とほとんど変わらなかつたりする。それでもあきらめずにやること。伸びるまでのある程度の時間。これに耐えることが必要だ。

③学習のリズムが必要。一日だけががんばっても次の日にやらなかつたらアウト!その日に思いついた科目をやっていると、必ず長期間やらないう科目が出てきてアウト!英数は毎日やるタイミングで、残りの科目は一日おきとか、とにかくリズムを作ってそれを守ること。ただし、国立大学志望の人は、理系の場合、「国社をいつからやるのか」、文系の場合、「理科をいつやるか」がポイントになる。他の主要科目が遅れているなら、十一月まで開始を遅らせることも必要。

④過去問をやる時間を確保する。高校大学受験に限らず、司法試験から医者国家試験、更には運転免許の試験まで、過去の研究は大切だ。何がどう出ているか。そして、どう解けばいいか。自分が苦手な問



題分野は何か。そうしたことは、全て過去問があればこそ分かることだ。十月から、遅くとも十一月から、一週に一年分ずつ英数国は過去問を解いていく作業を怠らざり入れたい。

⑤受験生は、(勿論、大学受験生も)、秋から冬にかけて大きく伸びる。夏までの勉強は、いわば知識を入れる勉強。秋からは、それをアウトプットする勉強。夏までに入れた知識を忘れることなく反復しつつ、問題を解く作業を重ねていけば、模試などの点が飛躍的に上がる。

⑥志望校で安易な妥協はしない。高校受験でもある程度いえることだが、大学受験では、いくつかの大学でも受験可能である。現役生で七、八校というのも珍しくない。だから、やれる所までやってそれから最終決定するぐらいの気持ちでよい。ただし、勉強もせずに、安易なことを考えて高望みするのは、これを「バカ」という。

⑦同じことをやっているのに、伸びる人と伸びない人がいるがその違いは明確に存在しているのだ。余り考えずにただくり返すだけの機械的勉強でもやらないよりははずっとましなのだが、考えてやっている人とは大きな差がついてしまう。残念ながら、そのことを指摘してくれる教師は少ない。また生徒も受験勉強の経験をそう何度もできるわけではないから、他の人と自分の違いを「出来る出来ない」以上には分析することはかなわない。「出来る人」に尋ねても、使っている参考書や勉強量を教えてもらえる程度だろう。だから、私がいつてやるのだが、伸びる人は、とにかく考える。調べる。答えがなくてもあきらめない。質問する。細かいことにも、望ましい成果につながるようなこだわりを持たせる。例えば、不明の単語があったら、必ず調べたり、一方でその意味を前後からあてようとする。一日だけでは、差は生まれませんが、一ヶ月もたつと、考える人と機械的作業の人とは大きな差がつくこととなる。自分はどうなの

か、よくよく考えてみることだ。

⑧負の連鎖から脱却する。塾には来る。でも集中しない。課題はやらない。模試は受けるだけ。こういうのを負の連鎖という。やってはいけない小さな失敗を毎日毎日重ねていく。心のどこかではまずいと思いつつ、止まらない。これは自分をだめにする。一時間一時間、歯をくいしばって小さな成功を積み重ねていく人との差は歴然。やるときは歯をくいしばれ。

●以上、思いつくことを書いてみた。人が一生懸命やって無駄なことはない。自分の願望をしっかりとみつめ、一杯の力を出してもらいたい。因みに私たちは、先に生まれ生きた者として、また自らも受験を経験した者として、きみ達の味方であり、同士である。きみ達が前に進みたいという気持ちをもつ限り、全力で応援をする。もし、行き詰まるようなことがあればいつでも相談してほしい。

(小林(健))



## 有限じゃない

●有限性を認識できたとき、物ごとの見方、世界の見え方が変わってくる場合があります。

「三年生の先輩は泣いていましたよ。」  
体育祭や文化祭の終わりに一年生が目にする光景なのでしょう。彼ら一年生には、部活などで一緒だった、厳しくも朗らかで、快活でもあった先輩が学校の行事で泣いている姿はとても印象に残るものようです。

●「これが最後なんだな。」という気持ちは、本当にその最後にならなければ、そしてその本人・当事者でなければ、なかなか分からないものなので

しよう。今年泣いていた三年生も「どうして先輩たちは泣いているのさ？」とかつては思っていた一年生の一人だったかもしれません。

●完全に漫画レベルで恐縮ですが、もし仮に、タイムマシンという甘く危険な装置が使えるとしたら(入試近くにこの話題で一瞬盛り上がる子供たちは少なくありません。夏休みに戻りたいという受験生が多いです。今年の夏も終わりましたが…)人はどう変わるでしょう。

「何度でも自由に使える」だときつと怠惰になるでしょう。ここでもやはり、「ただ一度だけ使える」という「有限性」が付加されれば少しは慎重になるかもしれません。

●タイムマシンもの、タイムリープものの作品の中でも、「最後の一回」をどう使うかが物語を盛り上げる要素として設定されている場合がよくありますね。

●さて、現実の受験生の話に戻しましょう。二期期になると、毎月の塾での模試、学校での校内実力テスト、中間テスト、期末テスト、外部に受けに行く会場模試と一気に試験の種類と回数が増えます。

●そうなると、試験ごとに力を付ける人、逆に一回一回の試験を軽く流してしまう人に分かれます。

●試験ごとに力を伸ばす人は、一回一回を真剣に受けます。一回ごとに試験への体力や耐性を付け、集中力を養います。志望校判定を見て苦しみ、自分の答案を見てあがきま

す。一回一回が常に最後の一回だと思っているわけではないでしょうが、少なくとも彼らは、本番が近づいていること、そして残りの時間が有限であることを察知(おそら

く感覚的に)しているのだと思います。



きちゃんと丁寧に積み上げているように見えます(彼らは必ず解き直しをします)。すごいな、いいぞいいぞ、と思います。(逆に一回を流してしまう人は、たまたまその本気にならなかつたというだけでは済みません。実は今後本気になれない、力を出せなくなるための負の備え、負の経験、負のトレーニングに全力でがんばったことになりま

す。これが怖い! 私にも経験があります。本当に怖い!) (五日市)

## 我慢する

●最近の生徒を見ると、我慢が出来ない生徒が徐々に増えている様子が見られる。授業中、休憩時間等あらゆるところで見られる。今までその時と場所にに応じて言動を行う(TPO)といった基本的なことを、しっかりと身に付ける機会がなかったかのようである。

●私自身を振り返ってみると、これらのことができていたか。残念ながらそれほど出来ていなかったと思う。しかし、もしTPOを逸脱すれば、当然叱られていた。今でも覚えているが、実際に中学二・三年時の林間学校と修学旅行で結構こっぴどく叱られた記憶がある。そんな経験を少しづつ成長してきたのだと思う。

●しかし、最近の生徒、特に小学生に聞くと私たちが注意することを、学校で注意された、あるいは叱られたという生徒はわずかである。生徒に「学校では叱られないのか」と尋ねれば、「叱られません」と返ってくるのである。これは生徒自身にとっては大変不幸なことである。もちろん生徒自身が注意されたという認識を持

っているかどうかは別であるが、明らかに学校でのしつけは上手く回っていないのである。例えば姿勢、言葉遣い、雑な文字、休憩時間の使い方、友人を待つ時の待ち方、そして公共の場所でのふるまい等。今書いたのはこれらの一部であり、おそらくまだまだ沢山の事象がでてくると思う。

●ではなぜこれらのことが大事なのか。わかりきったこととして、社会に出て仕事を持つようになる、TPOは絶対必須であるからである。だから学生のうち自身につける必要があるのである。では学生自身にとって今現在役に立たないのか。そうではない。TPOというのははじめである。状況判断をしてその時にふさわしい言動をするということである。かなり高度な営みである。そしてこれらのことを自分で判断できるようになると、成績も徐々に上昇していくのである。ところで、一年くらい前から生徒の間で「KY」なる言葉が出てくるようになってきた。生徒に聞いてみると「KY」は「空気が読めない」の頭文字だそうだ。言葉の良し悪しはともかく、その場の雰囲気を読むということへのきつかけになつてもらえればと思う。

●我慢をするということは大変なことである。我慢をせずに行動することも大切である。ただしこれらはその時と場所に依りて使い分けなければならぬ。特に生徒は前者が苦手な場合が多い。だから我慢することを教えるなければならないのである。(岡本)

## 夢・やいたて(や)④

●八月号は休載。七月号で、孤独な画家の話

書いて終わった。今回はその続きである。その孤独な画家は、素晴らしい作品を書き上げ、それを誰にも見せることなく死んだ。彼の作品は、彼の死とともに灰になる。こんな画家がいるだろうか。

●もう一つ例を挙げよう。素晴らしい才能に恵まれた作曲家がいるとする。彼は名曲を作り続ける。しかし、それは五線紙に閉じ込められたまま。一度も発表されることはなく、消えていく。こんなことがありうるだろうか。

●答えはともに否である。画家も作曲家も「やりたいこと」が絵を描くことであり、曲を作ることであれば、誰の眼にも触れなくてもいいはずだが、恐らくそれは彼らが望んでいることではない。彼らが望んでいることは、絵を描いて曲を作って、世の中で支持してもらうことなのだ。賞賛を受けることで、自分の存在を確認することなのだ。勿論、経済力がなければ、その芸術的行為も成立しないから、絵や曲で「お金を稼ぐ」ことも彼らの望みの一つである。(以下次号・小林(健))



### ▲▼▲継続希望の方へ▲▼▲

- ▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡下さい。

## 創学舎の本

### ■愛の壁■

—お父さんお母さんあなごの親子関係—  
著者: 小林 憲右  
2006年5月1日発行 (1,500円税込)

新星堂他全国書店にて  
好評発売中!